

bio

経歴・プロフィール

アーティスト: **ベアタ・パテル (BEATA PATER)**

★★★★ ダウンビート誌4つ星★★★★

『実に興味深く斬新な作品。ベアタ・パテルはFire Dance収録の全11曲を歌詞の無いメロディーで歌い切っている。大胆かつ果敢な決断だが、それに見合った成果が実現されている。』

ダウンビート誌 (ボブ・プロツマン; Bob Protzman)

『ジャズとR&Bの新たな可能性を切り拓く音楽』

AllAboutJazz.com (C・マイケル・ベイリー; C. Michael Bailey)

『ベアタ・パテルが星4.5を獲得。ボーカル・ジャズの未来は安泰だ。』

CriticalJazz.com (ブレント・ブラック; Brent Black)

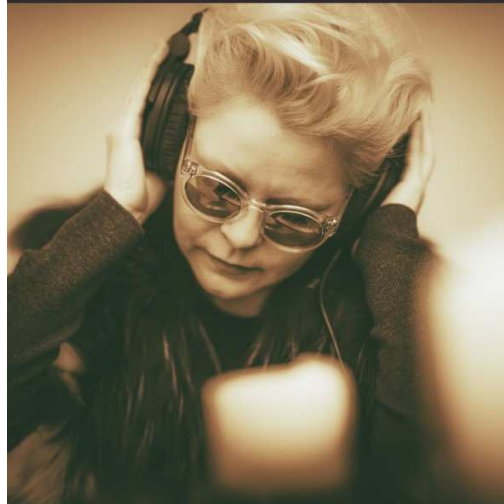
世間には、「歌手」と、声を楽器として演奏する「ミュージシャン」とが居るが、ベアタ・パテルは明らかに後者である。ベアタが個人的に「神」と崇敬するサラ・ヴァーンやお気に入りのシャーリー・ホーンの深淵な情念や叙情的な表現力による歌詞の解釈、彼女が大いに影響を受けたベティー・カーターを踏襲する空想的浮遊感のあるライン、彼女の驚異的歌唱力によるバイオリンの練習曲のボーカル編曲など、いずれにおいてもベアタは最も純粋な意味での創造力を発揮している。

最新作「Tet」は、ベアタの9枚目のソロアルバムだ。「Tet」とはヘブライ語アルファベットの9番目の文字であり、9という数字のシンボルでもあり、実に巧妙なタイトルであるが、ベアタによると、それだけではない。ベアタは「この文字は何かを入れておく器の形をしていて、創造の源、つまり創造力の象徴です。この文字には、徳が隠されています。」と言う。

本作において、ベアタは、金管・木管8本、弦楽器8本とピアノ、ベースという18人編成のバンドを起用し、ジャズの代表作2曲と、アメリカン・ソングブックの往年の名曲3曲、ビル・カントスによるモダンなスタンダード、そしてベアタの長年の親友チップ・ホワイトによるオリジナル3曲を演奏している。

収録曲は、フレディ・ハバードの『リトル・サンフラワー』、チック・コリアの『クリスタル・サイレンス (歌詞はそれぞれアル・ジャロウとネヴィル・ポッター)、永遠の名作『インヴィイテーション』、『オールド・デヴィル・ムーン』、『レイジー・アフタヌーン』、ビル・カントスの『アイ・フィール・ユー』、チップ・ホワイトの作品『ザ・カウンテス』、『ストレイズ』、『オーデ・トゥ・マックス』で、いずれも傑作だ。

ジャンルの壁も客観的な分類も全く知らずにポーランドで生まれ育ったベアタは、物心つく頃から極めて自然な形で音楽に没頭していた。しかし、ベアタは自己表現を追求するために、ジャズの道を選んだ。



www.BeataPater.com

B&B
records

「私がジャズを『歌う』理由は何か？それはジャズが感情を大切にしているからです。感情は人生で最も大切なもの。感情は人間を人間たらしめ、人間を真に導くものです。感情が無ければ、人生は無意味です。」

近年、ジャズを極めて限定的な範囲内で定義しようとする試みが多数あったが、デューク・エリントンの「ジャズは自由であり、今までに演奏されなかったことを演奏する自由がある。」という言葉により最も的確に表現されるように、ベアタはジャズという遠大な芸術形態を、その真の伝統である制約の無い自由に基づいて把握している。

ポーランドから旅立ち、イギリスや日本に在住した後、ベアタは1994年にサンフランシスコにたどり着き、その偏見の無い気風は、何ものにもとられない自由な創作活動において理想的であると考えた。

古典的なジャズボーカル技術に精通しつつ、極めて幅広く果敢な表現力を持ち、その両方に対して同じ姿勢で取り組むベアタは、『Black』（2006年）、



『Blue』（2011年）、『Red』（2013年）の「カラー」シリーズ3部作において、その両方の手法をブレンドした。マイルス・デイビスやフレディ・ハバード、ハービー・ハンコック、モンゴ・サンタマリア、そしてポーランドのクシシュトフ・コメダ等の巨匠による様々なスタンダード楽曲のほか、自身の秀逸なオリジナル楽曲や、頻繁に共演するマーク・リトルの楽曲を採り上げ、ベアタはジャズボーカル芸術の最前線において、独自の立場を築き上げた。『Blue』では歌詞の無いボーカル手法の活用を開始したが、この手法はスキャットとバイオリン独奏の中道という独特の位置づけにある。ベアタはスキャットとバイオリン独奏を適宜切り替えていることもあるが、多くの場合その両者は絶妙なサウンドにブレンドされている。

「自分のことも、自分が歌う理由も熟知しています。私が歌うのは自分の魂であって、歌詞は不要ですので、ありません。」

ベアタは、素肌のような緊密さと、何者にも囚われない意のままの自由な冒険心の両方の方向性を、それぞれ個別に追求することに決めた。素肌のような緊密さを追求する試みは、2014年の『Golden Lady』で初めて行われたが、この作品では、ブラジルやアメリカからアントニオ・カルロス・ジョビンやスティービー・ワンダー、ゴードン・ジェンキンス、マルコス・ヴァーリ、ハザオ・ジ・ヴィヴェー、ディミトリー・ティオムキン、オスカー・カストロネヴィスなど、幅広いソングライターによる秀逸な作品が揃っている。

自由な冒険心については、2016年の衝撃作『Fire Dance』で余すことなく発揮されている。この作品は精鋭メンバー7名構成のバンドと、一部楽曲ではバスからソプラノまで最大16パートにおよぶボーカルのオーバーダブが採用されているが、オーバーダブは全てベアタがそれぞれの楽曲に合わせてアレンジし、伝統的手法により、それぞれのパートを実際に歌ったものである。ベアタの極めて革新的なジャズスタイルに加えて、中東、北アフリカ、東欧の即興的民族音楽など、熱狂的でエキゾチックなワールドミュージックの影響や、R&Bの濃厚な影響が見られ、いかなる分野にも属することの無い、全く斬新な融合物としてのフュージョンが醸成されている。

名門誌 ダウンビート

『Fire Dance』を2017年ベストアルバムに選定

ベアタの個性的な旅路は、目が離せない映画のようである。ベアタは一生涯を通して音楽の中で過ごしてきたため、マイルス・デイビスやジョン・コルトレーン、ダニー・ハザウェイ、ジャコ・パストリアス、ハービー・ハンコック、ウェザー

リポートなど、初期に影響を受けたミュージシャンの音楽と出会った経緯さえ、よく覚えていないほどである。ベアタとそうしたアーティストの出会いの場は、自宅だけでなく、芸術面で偏見の無いポーランドの先進的な教育制度でもあった。そうしたポーランドの教育制度において、幼稚園生だったベアタの音楽的才能が見いだされた。ベアタはワルシャワ大劇場のウラジスラフ・スコラチェフスキー合唱隊の一員として、ビゼー、ムソルグスキー、ワーグナー、ペンデレツキー等のオペラに出演したが、それはアーティストの卵であったベアタに絶大な影響を与えた。

「それは魔法のような別世界で、そこに出来るだけ長く居たいと誰もが望むようなものでした。それは夢のように美しいおとぎ話の世界であったことを覚えています。」

ベアタは6歳の時にバイオリンのレッスンを受け始めたが、レッスンは厳しく、好きでもあり嫌いでもあったが、それもボーカリストとしての彼女のキャリアを开花させた。有名なオペラ歌手であったベアタのバイオリン講師の妻が、ベアタのボーカルの才能を見だし、ベアタがボーカリストとしてのキャリアへと踏み出し、バイオリンで習得し得なかった事を歌で表現するための支援を提供した。

14歳になると、ベアタはジャンルにとらわれない音楽性の自己グループ「FunLight」を結成したが、それがポーランドで有名になり、ポーランドの音楽シーンにおけるベアタの地位が確立された。またこの時代は、彼女の歌詞無しボーカルスタイルが生み出された時代でもある。

ロックやパンクロックへの一時進出、バンド「デューター」への参加、スタジオで様々な音楽の制作へ参加したことなどにより、ベアタのプロとしての技量はさらに磨きかけられた。

交換留学生として渡英したベアタは、そこで教鞭を執ることもあった。また、当初6か月の予定で日本に滞在することが決まったのも、イギリス滞在時である。しかし、日本滞在は結局10年におよぶものとなった。

「日本は実験的活動や冒険的な試みに適した環境だと思ったのに、実際にはその正反対で、極めて伝統的なジャズボーカルを求められました。しかし、自分の伝統的ジャズボーカルに磨きがかかりましたので、貴重な体験だったと感謝しています。」

ベアタの在日10年間は、各地ライブハウスでの現地ミュージシャンや来日ミュージシャンとの演奏や、横浜音楽院で常勤講師を務めるなど、休む間もなく怒濤のように過ぎていった。また、在日時には、ウォルター・ビショップJr.をはじめ、来日した正統派ジャズの巨匠達と共演する機会に恵まれた。(ウォルターは、渡米後ベアタがニューヨークのバードランドで最初に共演したミュージシャンでもある。)さらに、在日時には、当時から現在に至る長年の共演者である、ベーシストのブーツァ・ネチャックに出会っている。1993年のソロデビューアルバム「Session」では、ネチャック (b) とドニー・シュヴェンディーク (pf) が参加し、ネチャックは2作目の「Duet」もレコーディングした。



また、日本滞在時には、ボーカリストとして、ベアタは映画やテレビCMなど、スタジオでのレコーディングに多数参加したが、ベアタにとって、このときの経験が後の自己プロデュース時にかげがえの無いものとなる。現在も日本で大人気のベアタは、日本を離れて以降、最終回の2017年を含め、日本全国ツアーを5回遂行してきた。その他の主要なツアーとしては、2011年のイギリス、2014年のチェコと2015年のポーランドのツアーがある。

完全に成熟し、極めて広範なスタイルを操るベアタは、自らの多様で幅広い音楽観を緻密に追求してゆく使命を完遂すべく、留まること無く活動し続けている。ベアタのツアーやレコーディングは全て、自らの目標達成のため、手本となる様々なミュージシャン達との共演から学び、またボーカリスト、バイオリニスト、作・編曲家、そして音楽の将来的方向性を見据える者として、影響力の強いメッセージを送ることを目的に特化して計画され、構成されている。弦楽八重奏が参加したベアタの最新プロジェクトは、2017年4月に録音された。

30年間にわたって思い描き続けた極めて斬新な芸術性を身に付けたベアタは、本当の意味での冒険へと旅立ったばかりだ。